

被災地住民のナラティブに着目した道路インフラの社会的役割に関する研究
—能登地震を事例として—

A Study on the Social Roles of Road Infrastructure Based on Narratives of Disaster-Affected Residents: A Case of the Noto Peninsula Earthquake

山寄 渉太・○中尾 聡史・大西 正光

Shota YAMAZAKI・○Satoshi NAKAO・Masamitsu Onishi

This study examines how disaster-affected communities survive autonomously after the 2024 Noto Peninsula Earthquake by focusing on “survival core” infrastructure. Through ethnographic fieldwork and narrative interviews in Suzu City, it reveals how physical and social infrastructure are inseparably linked. Residents’ stories show that the Kiriko festival motivated collective action to restore damaged roads, enabling both cultural continuity and community cohesion. The festival functions as a social survival core by sustaining relationships and hope, while roads serve as the physical survival core that makes these interactions possible. Together, they support the community’s capacity to endure and recover.

1. はじめに

能登半島地震発生から2年が経過した2026年2月現在、インフラの応急復旧は完了したものの、本格的な復興への道のりは依然として険しい。このような物理的な再建が進む一方で、震災以前から問題となっていた人口流出はさらに深刻化しており、地域の衰退は時間の問題である。そこで本研究では、災害後の地域において、地域や住民が自律的に生き延びようとする力を支える要素を「サバイバル・コア」として捉え、その要素こそが物理的・社会的インフラであるという仮説を立てた。このサバイバル・コアを考える上で、地域社会が消滅と存続の間で揺れ動くダイナミクスを捉えるためには、従来の静的な視点を超えた、ナラティブの視座が不可欠である。しかし、物理的インフラの整備がいかにして社会的インフラの維持とつながり、地域の長期的な存続に貢献するのかを、住民の視点から統合的に論じた研究は十分ではない。したがって、本研究の目的は、災害後の危機的状況にある地域が自律的に生き延びていくために必要な物理的・社会的インフラ（サバイバル・コア）の存在を、地域住民の語り（ナラティブ）に基づいて考察することである。

2. 地域への参入によるリサーチクエスションの具体化

(1) 地域参入に関する概要

本研究では、現場の実態に即したリサーチクエ

スチョンを構築するため、石川県珠洲市を対象に、2025年に3度のフィールド調査を実施した。地域への参入にあたっては、多様な属性を持つメンバーで構成される「奥能登キャラバン」に同行する形態をとった。これにより、インフラ復旧に限らない多角的な視点からの対話が可能となったほか、繰り返しの訪問によって住民との信頼関係が形成され、多様な語りを引き出すことができた。さらに、地域のアイデンティティであるキリコ祭りに参加する参与観察も行った。

(2) サバイバル・コアの着想

具体的な問題意識の契機は、祭りの開催に向け道路補修を行政に掛け合ったという語りである。ここから、従来看過されてきた住民視点での土木インフラとコミュニティのつながりに着眼し、事前の仮説と現地での知見を融合させた。その結果、物理的・社会的インフラこそが復興の核であると捉え、「災害後の地域において、自律的に生き延びようとする力を支えるインフラの最小単位」をサバイバル・コアと定義した。本研究では、将来的な応用を見据え、まずはこのサバイバル・コアという概念の存在を証明することを研究課題と定めた。

(3) 生き延びようとする力に関する議論

本節では、既往概念を整理し、本研究における「生き延びようとする力」を定義する。まず、望月(2020)¹⁾による「生きがい」の議論を参照する。望月は、「生存」を単なる生物的な維持と区別し、

主体的に自らの可能性を選び取る「実存」の側面を重視したが、その視点は個人に留まる。一方で、中村(2008)²⁾らによる「希望学」は、地域社会の持続性を論じているが、個人の観点は希薄である。

そこで本研究では、①「生存」に自律的な「実存」を含め、②個人と地域の双方を射程に収める必要があると考えた。②の理論的支柱として、人間を個と社会の二重構造と捉える和辻哲郎³⁾の「間柄的存在」を援用する。これは、珠洲市の住民が他者との関わりを通じて活力を得ている語りや、個人から地域へ、地域から個人へと活気が双方向に受け渡される実態とも合致する。以上より、本研究では「生き延びようとする力」を、住民及び地域が「活動ないし行為から得る、生存していくために必要な力」と定義する。これは、主体的な選択に基づく「実存」と、個人と地域が相互に規定し合う「間柄」を統合し、災害後の地域が自律的に存続するための動的な力を指すものである。

3. 住民の災害ナラティブとインフラ機能

上記の奥能登キャラバンは研究課題の発見には最適な組織でありながら、キャラバンの形式ではこの研究課題に集中して住民の語りを得ることは難しかった。そこで、キャラバンの形式ではなく、キャラバンで出会った住民を中心に個別インタビューを行った。本調査は、20代から70代の住民8名を対象に、住民自らのナラティブを引き出すことを主眼とした半構造化インタビューとして実施された。

インタビューにおける住民の語りからは、祭りの実施と道路復旧が不可分な関係にあることが明らかになった。震災による道路の損壊は、巨大なキリコを巡行させる祭りの開催にとって決定的な物理的障壁となっていた。しかし、住民はこの状況を単に受け入れるのではなく、祭りの実施を復興への強い動機として行政への働きかけを行った。具体的には、震災直後の2024年は道路状況が悪く、キリコの巡行を断念せざるを得なかったが、翌年に向けて「若い人と祭りせにゃいかんと約束した」という地区会長による、行政への粘り強い働きかけに関する語りがあった。彼らは、「来年は動かせるようにするからまた祭りする」という若者たちの熱意を背負い、祭りの実施を前提として「道を直してもらわんと駄目だな」と具体的な要望を行った。その結果、市側から「道路だけ仮にでも直します」という確約を引き出し、キリコが

通行可能なレベルまで道路の応急処置がなされたことで、念願の巡行が実現した。

4. 語りを踏まえたサバイバル・コアの考察

地域活動の中でも特に多くの語りが得られた「祭り」に着目し、それがサバイバル・コアとして機能するメカニズムを考察する。まず、珠洲市における住民の定着要因は「人との関わり」にある。インタビューでは、地域における関係性の深さが定着の理由として語られる一方で、他地域での生活への不安も吐露されており、住民の生存にとって他者との交流が不可欠であることが示された。祭礼はソーシャル・キャピタルを醸成し災害に強いコミュニティを作る機能が指摘されているが、珠洲市においても住民は祭りに交流を求めている。震災による集会の消失が孤独感を招いた語りからは、交流が単なる個人の寂しさの解消にとどまらず、個と社会が相互に規定し合う関係性の中で、地域の不安をも払拭する営みであることが読み取れる。祭りは、この交流の機会を提供する社会的インフラとして機能している。さらに、祭りの成立には物理的な「空間性」が不可欠である。珠洲の祭りは、キリコが道路を練り歩くという空間的特徴を持ち、この空間を確保することで伝統が継承され、その結果として交流が達成されている。このように、歴史的背景を持ち安定的に創発される祭りは、他の行事では代替不可能な存在である。以上より、空間性による伝統継承を介して住民が主体的に交流を行い、住民と地域の生存を支える「祭り」は社会的サバイバル・コアである。そして、その祭りの空間性を物理的に成立させる「道路」もまた、物理的サバイバル・コアとして存在することが語りから示唆された。

参考文献

- 1) 望月美希, 震災復興と生きがいの社会学: 〈私的な問題〉から捉える地域社会のこれから, 御茶の水書房, 2020
- 2) 中村尚史, 地方の希望—希望学・釜石調査の概要—, 社会科学研究, 59(2), 11-33, 2008
- 3) 和辻哲郎, 風土—人間学的考察—, 岩波書店, 1948